

何だか楽しくなってきた

戸田雅美

夏休みも近づいたある日の幼稚園。遊んだり、プールに入ったりした後、大掃除をすることになったらしい。園庭では、砂場の遊具をたらいに入れて洗う子どもたちの姿があった。大きい砂場の遊具は五歳児が、小さい砂場の遊具は四歳児が洗っていた。

「この砂場はね、いつもは、もも組さんが使うんだけど、もも組さんは小さいから、さくら組がやってあげるんだよ」と、四歳児のれいなが、私に説明してくれる。つい何か月前には、れいなたちも、「小さいもも組さん」だったにもかかわらず、砂場の遊具を水洗いで干して、しまうという仕事を任されて、すっか

りお姉さん気分になっている。「そうだよ。小さい子は、遊んじゃうから、ちゃんと洗えないんだよ」と、たくも、遊具を洗う手を休めずに私を見上げる。たくの手の動きが、丁寧に洗えていることを主張しているように見えて、私は思わず、「とつてもきれいに洗わなくっちゃいけないのね」と答える。「そう、だから、もも組さんじゃ、無理なの」とゆうかも続ける。「ふうん、こんなにきれいになったら、もも組さんも、喜んじゃうね」と私。この会話を聞いていたらしい周りの子どもたちも、にこにこと誇らしげになる。

夏の暑い日に、冷たい水で遊具を洗うのは、むしろ

気持ちがよさそうである。あまり仕事らしくなく、遊びのようにも見える。しかし、きつとこの仕事が始まる前に、担任が話したのであろう「小さい組のために」「みんなにしかできないお仕事」というメッセージが、水遊びのようなこの動きを、大きな意味のある仕事と感じさせている。その上、赤や緑の遊具は、水洗いされて、夏の日差しを反射すると、まるで新品のように輝いて見える。

「砂場の道具が、こんなにぴかぴかになって、きつと『さくら組さん、ありがとう、気持ちいいなあ』って言うてるね」と私が言うと、みんな顔を見合わせて「ふふっ」と笑う。照れくさそうな笑いの中に、私は、子どもが、ぐんと伸びようとするその瞬間を見たような気がした。こんなふうには、楽しいにもかかわらず、「小さい子」のためになって、やったことの成果がきらきらと輝いて見える仕事は、子どもたちの心を大きく成長させるに違いない。

「わあ！ みんなだけで、もうこんなにきれいにしちゃったの！」その明るい声に振り向くと、若い担任が、その言葉どおり驚いたけれども、それがうれしくてたまらないといった笑顔で立っていた。その声に振り返った子どもたちも、よりいっそうの笑顔になった。どうやらここは、担任に任せたほうがよさそうである。私はそう判断して保育室に入った。

保育室では、同じクラスの子どもたちが、ままごとの遊具の整理をしていた。ままごとの遊具が集まっている一角には、六人の子どもたちがいて、流し台や棚の中の遊具を次々と出しては、テーブルに並べている。ひろとは、ぞうきを片手に、空になった棚を拭いている。みくとあいは、引き出しの隅から、おそらく食材に見立てて使ったのであろう、毛糸や、紙切れ、粘土のかすを取り出している。

しかし、先ほどの、砂場の遊具の水洗いのような生き生きとした雰囲気は感じられない。室内は蒸し暑く、

水を使うような快感もない。仕事そのものも、細かい割には、その成果がすぐには見えにくい。苦勞の割に報われないと、四歳児には、元氣が出ないのかもしれない。私は、何だか、ままごと担当の子どもたちが気の毒になつてきた。担任は、と見ると、子どもたちと汚れてしまつたらしいの水を替えようと悪戰苦闘している姿が目に入つた。当分ここには戻れそうもない。

「ひろと君、ぎゅつぎゅつてぞうきんがけしてて、本当のおとうさんみたいね」と私。「ひろと君、おとうさんじゃないよ」と、あい。「私たち、おうちごっこしてるんじゃないの。本当のお掃除してるの」と続ける。そうか、この子どもたちも、ちゃんと仕事をしてる、遊びじゃないと抗議したいのだ。

でも、私の言葉に、ひろとが、まんざらでもない笑顔になつたことに気づいていた私は、「そうね。でも、そのお掃除のやり方がね。ひろと君のぞうきんがけが、本当のおとうさんがしているみたいだなあつて

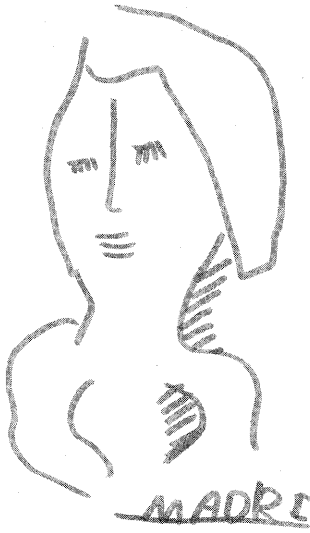
思つたのよ。あいちゃんは、本物のおかあさんがやるみたいに、ちゃんと同じお皿に分けてるでしょ。あいちちゃんのおかあさんもそうやって同じお皿に分けてるの？」と言つと、「うん」と答える。あいの手の動きが楽しそうになつたように感じる。

「ひろと君のおとうさんね。こんなふうには拭くんだよ」とひろとは、狭い棚に頭を突つ込むようにして、棚の裏側もていねいに拭いて見せる。無理な体勢にもかかわらず一所懸命に拭いているひろとを見て、「ひろと君、本当におとうさんみたい」と、ほかの子が笑う。ひろとはますます張り切つて、隅々までぞうきんを突つ込んでいく。笑い声に惹かれるように、それまで、ぞうきんを投げたりしていたのぶやが、キツチンの開きに首を突つ込んで拭き始める。

すると、みくが、それまで、乱雑に引き出しに入れてようとしていたスプーンとフォークを、きれいに仕分けして、重ねて見せた。あいが、すぐに気づいて、

「みくちゃん、きれい」と言うと、「みくのママね、いつもやってるもん」と自慢そうに答える。くすくすと笑いながら、横目でこのやり取りを見ていたるりことめぐが、ままごと用のエプロンとスカートを、手で伸ばして畳みだした。「あら、こちらのおかあさんたちは、アイロンをかけてしまうんですね」と私。その言葉に、るりことめぐは、二人で顔を見合わせて、手を口に当てて、笑う。

「なんだか楽しくなってきた」と、唐突にあい



が言う。「なんだか楽しくなってきた」とひろとも続ける。そうか、動きが、楽しそうになってきたと思っ見ていたけれど、子どもたちにとっても、楽しくなってきたのか……。子どもの心が生き生きと動き出す時間に、子どもが充実した体験をしている時間に、立ち会えた思いがして、私の心もうれしくなる。

子どもは子どもなりに、遊びと仕事の違いを感じている。しかし、遊びにしても仕事にしても、生き生きとした心の動きが伴うものであってほしい。子どもにとっての仕事は、義務として仕方なくやるものではない。本来は、大人にとっての仕事もそういうものである。保育において、子どもをしている体験の質に敏感であることの意味を、改めて考えさせられた場面だった。